

KONAN UNIVERSITY

指定討論3 (2009年度 公開シンポジウム報告 戦争体験の記憶と語り)

著者	松本 泉
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	11
ページ	50-53
発行年	2010-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00002686

指定討論3

松本 泉

毎日新聞の松本です。私は何も使わずに話させていただきます。簡単に私自身のことを言いますと、一九八六（昭和六一）年の入社です。もう二〇年以上この仕事をしております。松江支局、京都支局、大阪の社会部などで仕事をしておりましたが、今大阪本社の地方部という支局を統括するところでデスクをしております。ここ一年ほど、あまり外に出ることできず、内勤が多くなりましたので、宿題はあまりできておりません。

今までいろいろな方のお話を聞きました。新聞社というのは、特に平和取材、戦争体験取材の専門の部署があるわけではなく、それぞれ専属する記者がいるわけでもありません。ここに立たせていただいているのが自分でも恥ずかしいくらいですね。ほかのルーティンの仕事の合間を縫って、戦争体験をされた方の話を聞いたり、そういうことを研究されている方に取材に行ったりということで、本当に細切れの取材で、何か信念があって続けているというほどの自信はありません。ただ、私は一九六一（昭和三十六）年生まれで、戦争は全く何も知りません。うちの父親、母親の話しか聞いたことがあります、ませんが、世代としては高度経済成長の恩恵を一身に受けて、

いい時代だけしか知らないものですから、格好よく言えば、自分たちの親の世代のマイナスの遺産をなんとか伝える仕事をしないと新聞記者になった甲斐がないじゃないかと思っています。

幸いなことに、今日取材をすれば、明日紙面に載せられる仕事をしているわけですから、時間がある限り、自分でできる範囲のことをやろうというのが続けてきました。今はあまり外に出ないんですが、私は出身も大阪で、大阪で仕事をすることが多かったので、大阪、神戸が大きな空襲を受けた三月、それと七月、八月には必ず何か一本、戦争に関する原稿を出そう。それはどんな小さなものでもいいから、必ずその時期には書く、それを課題にしてみました。もちろん現場を離れてしまうとなかなか取材する時間もないのでできなかったことも多いですけども、今年の夏もなんとか四本書きました。宿題がちゃんと果たせたなと思っております。

だからと言って別に専門家ではありません。同僚や後輩の記者から、「平和取材、戦争体験者の取材をしたいが、きっかけがないんだ」とよく聞きます。でも、何もマニュアルとかこつがあるわけではなくて、「本当にやりたいなら、今から大阪駅に行って、七〇歳以上の人に片っ端から話を聞け」といいます。七〇歳以上の日本におられる方なら、必ず戦争の体験を持っておられる。これは間違いないことです。どんな体験であるにせよ、戦争に関わってこられたんですから、一〇〇人おられたら一〇〇の体験があるわけで、それを片っ端から聞け。目茶苦茶なやり方ではありますが。

ただし、われわれの習性として、どうしても非常にドラマチックな話を追ってしまいます。悲惨な話、残酷な話を追ってしまいがちですけれども、そういうふうには話を聞こうとすると、必ず相手の方はそれを察して、こいつは自分の話を値踏みして聞いているなと伝わるようです。だから、「むしろ話せない人の話のほうが大事なんだ。自分の言葉としてなかなか話せない人を見つけてこそ値打ちがあるんだ」というようなアドバイスもしています。

それともう一つ、「必ず嫌な思いをするよ」と言っております。これは戦後生まれ、戦争を知らない私たちの宿命かもしれません、思わぬことで嫌な思いをすることがたくさんありました。例えば半分くらいの方は、「あなたは何年のお生まれですか」と必ず聞かれます。「おいくつですか」。私は正直に言います。「ああ、じゃ、私の体験したようなことはわからないでしょうね」と言われるのが一番堪えます。わからないのは当たり前だけれども、私は私なりになんとか皆さんの思いを伝えようと仕事をしているのに、なぜそんなことを言われるのか。嫌な思いの一つです。これはこっちの勝手な言い分なんですけれど。そういうことがしばしばあります。

また、体験されている方は自分の体験が一番大変だった、一番厳しい体験だったと思われるはずですよ。よその方の話はさておき、自分の体験したところが戦争体験だと思われているわけですから、例えばそつけない返事をしたり、取材したあと原稿を出さずに紙面化されなかったりすると、「なんで私のあの話が載らないの。あなたは軽く見てるんじゃないや

いの」と言われる。それもつらいことではあります。

一度、震災孤児の話を書きたいなと思ったことがあります。大阪に収容施設があつて、三カ月くらいかかって、ようやくお一人見つけて電話をしたら、ものすごく罵倒されました。「なぜ私がわかったんだ。なぜ家の電話番号がわかったんだ。二度と電話するな」。それも一カ月ほどショックでした。こちらは匿名にして紹介してもいいし、いろいろな条件をつけられるのに、罵倒された揚げ句電話をガシャンと切られて、すぐ後にもう一度電話が掛かってきました。「本当に電話するな。おれのことも言うな。おれは震災孤児だということでも今までえらい目をいっぱい受けてきた。その追い打ちをかけるのか」。一カ月ほど立ち直れませんでした。自分がやっていることはおかしいんじゃないかなと思つたこともありました。

嫌な思いはたくさんするんですけども、たぶんこちらののぼせ上がりや勘違いが多いんだと思います。嫌な思いをさせられるのも、戦争体験を一つでも多く残していくための大切な仕事なんだと、今は納得しているつもりです。けれども、嫌な思いをすることはたくさんあります。

先ほどの中田さんのお話で一つ思うのは、実は本当につらくて厳しい体験をされた人ほど、すごく口が重いということです。私も何人かそんな方を知っています。一人、朝鮮半島から終戦直後引き揚げてこられた方で、「私の友達にすごく大変な体験をした方がおられる。その方とは五〇年以上付き合っているんだけど、先だって初めて話してくれた」という方がおられました。私はまだその方にお目にかかっていま

せん。こちらも心の準備をしないとなかなか聞きに行けないものですから。

それから、先ほどちらっと出ていましたけれども、京橋駅の空襲では一トン爆弾が何発か落ちて、何百人も亡くなっているんです。その直後に救援に行かれた兵隊さんがおられます。その方と話したのはもう一〇年くらい前です。八〇いくつかになられていましたが、「家族にもあの直後のことは一言も話したことがない。京橋駅に救援に行ったことすら話したことがないんだけれども、最初で最後だから、あなたに話すら原稿にしてくれ」と言われて、原稿にしたこともありました。

それから、疎開の話が出ていましたが、大阪大空襲で一家全滅してしまって、疎開していた小学校四年生が一人だけ助かった。その方は戦後、本当に大変な人生を送っておられて、自分の家族ができてからも息子さんか娘さんも亡くなられたという、絵に描いたような戦後史を歩まれた方がいます。一度その人に話を聞きたいと言われているんですが、まだ行けておりません。というように、本当に重い体験をした方ほど口が重いし、こちらもなかなかその人に接触できない。われながら、つらい取材ばかりをなぜしているんだろうと思うときもあります。

直接体験されている方は、平均年齢で八〇歳を超えられました。今だからこそ話しておきたい、書き残しておきたいという方が増えているのは事実です。記憶もあやふやになったとおっしゃる方が多いんです。一人でも多くの方に、こういう機会ですから、お目にかかって話が聞ける方には聞きたい

と思います。ありがとうございます。

私がいま実際にそういう体験を聞くときに気をつけていることが幾つかあります。一つは、いま目の前に座って話をされている人の体験こそがこの前の戦争で最も厳しくて、つらい大変な体験だったのだという気持ちで一時間なり二時間なり話を聞くこと。これはちよつと原稿にならないとか、この話はこの前聞いた人の話よりもなんとなくランクが低いな、なんてちらつとも思うと、だいたい目の前におられる方は敏感に反応されますので、この人の体験こそが一番重いんだという思いでまず聞くこと。それから、記憶違いとか矛盾とか、すごく多いんですね。絶対にそれはおかしいぞとか、そんな話がこの中で出てくること自体が変だなということがあるんですけども、指摘するとすごく怒られます。「私の記憶は絶対間違っていない」。訂正される方はほとんどおられません。だから、そこはさつと聞き流して聞いてあげること。これは案外大切なこと。こつちが引つかかって討論になると絶対にうまくいかないんです。あとで修正をしてあげるつもりで、とにかく間違っていないようが矛盾があろうがまず聞いてあげる。

それともう一つは、こちらが勉強していかないといけないんですね。話される方は自分が生きた時代の話なので、当然のように話されますけれど、私は「配給」とか「空襲警報」と言われても、聞いたことも受けたこともないので、さっぱりわからないですね。でも、それを知らないと言うと、だいたい話すのをやめられるんですね。それこそ「あなた、おいくつですか」から始まります。だから、配給でどんなものが

配られたのか。空襲警報というのはどういうふうに鳴ったのかという、その人の生活の、その当時のレベルに合わせた知識は必ずつけていかないといけない。基本的なことは聞かない。その人の体験を素直に聞けるような知識をきっちりと持っているかいないといけない。その程度のことしか準備できないですけれども、そういうことを気をつけて頑張っているつもりです。

とりとめもない私のつたない経験ばかりですが、実は心理学とか歴史学とか社会学でこういうことが研究されているというのを初めて知りました。もっと早く知っていれば、もう少しとまとまな取材ができたんだなと今反省しています。本当に心理学は大きく関わると思います。私は経験上、こういう場面でこういうことを聞いているといけないとか、こういう場面でこういうことをしてはいけないというのとはわかっていますが、もつと事前に聞いていけば、迷惑をかけたり嫌な思いをさせないで済んだ。たぶんものすごく迷惑をかけていると思います。嫌な思いをされた戦争体験者の方はたくさんおられると思いますし、私が反発して、それこそけんかになりかけたこともあります。もつと早めに、こういう学問があつて、研究されている方がおられるということを知っていれば、いろいろ教えていただけたのになと思っています。

自己流というのは、戦争体験を聞くに当たってはあまり通用しないとおります。新聞記者というのは職人みたいなところがありますから、先輩に教えてもらったり、取材相手に教えてもらったという、自己流で方法を模索していく

ところがあります。戦争体験を集めていくのは、やはりそれなりの技術と能力が要るとつくづく思っています。まだまだ研究途上とのことですけれども、心理学や社会学とか歴史学とか、そういう方面からアドバイスをきっちり受けた記者が一人でも多く育っていくべきだろうなと思っています。

それと先ほど、次の世代にどう読ませるかという話がありましたけれども、まさしく同感でして、われわれの仕事は読んでもらわないと意味がないんですね。ただし、いま戦争体験というのは原爆とか沖縄、東京の大空襲以外は本当に記録されている場所がばらばらなんです。本になったものもあれば、新聞記事になったものもある。市民団体の方が自費出版されている分もある。集約されている場所が一つもあります。だから、今こそきちんとしたデータベースをつくって、そこでプロの記者を育て、次の世代にいかにつたえて生かしてもらえるかというシステムをつくらないといけないなと実感しております。

とりとめのない話で申し訳ございません。もし何かご質問あれば、私の答えられる範囲で後ほどお答えしたいと思います。どうもありがとうございます。